

日語的「未遂行」事態之研究

黃其正 *

摘要

在日語的未達成事態裏有「未遂行」「未完遂」「未完成」的事態表現，這些事態的語言表現形式，主要是透過「-そびれる」「-そこなう」「-あぐねる」等的造語形態來表現。本研究的主要目的，是以未達成事態中的「未遂行」事態表現為對象，來研究日語中，語言表現者是如何利用這些言語形式來表現「未遂行」事態的規則。

本研究是以石井(2007)所提案的《アスペクト・ヴォイス》モデル的觀點為依據，把「未遂行」事態分「語彙的レベル」和「文脈的レベル」二段階來進行考察。在「語彙的レベル」裏面，通過檢討「-そびれる」「-そこなう」「-あぐねる」是如何和其它的動詞相接續？接續後所形成的複合動詞是擁有什麼意義、什麼樣的文法機能？綜合地來研究其彼此間的相互差異。來明白在「語彙的レベル」裏面，日語「未遂行」事態的語言事實及規則；另一方面，在「文脈的レベル」裏面，將研究的視點放在「未遂行」事態的成立背景，在研究結果當中，不僅清楚了「-そびれる」「-そこなう」「-あぐねる」所形成的「未遂行」事態的異同，也明白了「-そびれる」的特殊性。

關鍵字：未達成事象構造、《アスペクト・ヴォイス》モデル、〈結果可能〉、「未遂行」事態、語彙概念構造(LCS)

* 應用日語系助理教授



未達成事象における「未遂行」の一研究

黃其正 *

摘要

日本語の未達成事象表現へのアプローチとして、本研究は「-そびれる」「-そこなう」「-あぐねる」を対象に、未達成事象のひとつである「未遂行」事態を明らかにするものである。

ここでは、石井(2007)で提案されている《アスペクト・ヴォイス》モデルをもとに、「未遂行」事態を「語彙的レベル」「文脈的レベル」の二段階に分けて考察した。「語彙的レベル」では「-そびれる」「-そこなう」「-あぐねる」がどのようなV1と接続するのか、どのようなLCSをもつのか、その異同の検討を通して、それぞれが接続するV1の性質を明らかにした。一方、「文脈的レベル」では、それぞれの事態が成り立つ背景に着目し、三者の異同を明らかにすることにより、①と⑤V1に接続する「-そびれる」の特殊性がよりはっきりとみえてくる結果となった。

キーワード：未達成事象構造、《アスペクト・ヴォイス》モデル、〈結果可能〉プロセス、未遂行、語彙概念構造(LCS)

* 應用日語系助理教授



1、はじめに

われわれは、日常生活の中でよく「ご飯はまだ食べていない」「ご飯はもう食べた」のように、「まだ～ない」「もう～た」という形式を利用し、文の表現レベルで事態の達成・未達成を表すことが多い。一方、「食べそこなう」「プレゼントを渡しそびれる」「相手投手を打ちあぐねる」「ボールを投げ損じる」のように、「-そこなう」「-そびれる」「-あぐねる」「-損じる」¹ という語構成要素の結合を通し、語彙的レベルで事態の未達成を表現することもある。後者は、同じ事態を表現するものの、どのような役割を果たしているのだろうか。

ここではまず、文脈的レベルと語彙的レベルにわけて、表現上の相違について考えてみる。

1)A: 昨夜、晩ご飯は食べましたか。

B: いいえ、食べませんでした。

2)A: お昼は食べましたか。

B: いいえ、まだ食べていません。

3)14日の体重49.8 昨日は晩御飯を食べそこなった²ので減りました。

blog.livedoor.jp/a0tja0tj/archives/50497891.html

4)夕方に打ち合わせで秋葉原に行き打ち合わせ完了後、帰社、作業の続

き・・・ああ。晩御飯を食べそこなった・・・これから隣のファミマに行こ

twitter.com/@factron863

1)～4)はいずれも「食事をとっていない」という事実には変わりはない。文脈的レベルでは、1)のほうは「過去のある時点では食事をしなかった」というようなテンス的表現、2)のほうは、「動作の進行をながめて食べるという動作を行っていない」というようなアスペクト的表現である。一方、語彙的レベルでは、過去の時間(3)においても動作の実行様態(4)においても、[食べそこなった]で「食事をとっていないこと」を表現しうるのである。ここでは、文脈的レベルと語彙的レベルとの間に二つの相違点があるとみられる。ひとつは、文脈的レベルでは時間のとらえ方によってテンスとアスペクトとの細分化が行われるが、語彙的レベルでは時間的尺度を捨象し、事態の進行過程が「-そこなう」

¹ 本研究では語構成要素を「 」、語を[]で表示する。

² 特別の注記がなければ、各例の下線は著者によるもの。



という語構成要素に含まれるという点である。もうひとつは、いずれも同様に「食事をしていない」ことを意味するものの、それぞれ異なった事象を表すという点である。文脈的レベルでは、テンス的表現は動作の存在時点を、アスペクト的表現は動作の進行様態を表現するものである。それに対して、語彙的レベルの[食べそこなう]は、動作の開始・進行・完了に関する事象全体が語の語彙的意味のなかに含まれるために、テンス的表現にもアスペクト的表現にも用いられる。では、「-そこなう」などの語彙はどのように未達成事象の局面を表現するのだろうか。

「-そこなう」などの語構成要素を対象とした日本語の未達成事象についての研究は十分に行われているとはいえない。黄(2011)によると、日本語の未達成事象には「未遂行」「未完遂」「未成功」の局面がある。紙幅の都合上、すべてについてとりあげるのは難しいため、ここでは日本語の未達成事象へのアプローチの第一歩として、「未遂行」の局面に焦点をしばって、それぞれの語構成要素の異同を明らかにしたい。

2. 未達成事象へのアプローチ

本節では、日本語における未達成事象に関する言語現象について二つの観点からアプローチする。ひとつは、未達成事象を日本語の表現体系の中でどのように把握すべきかを考える。もうひとつは、「-そこなう」などの語構成要素と結合要素とのかかわりを観察する《アスペクト・ヴォイス》モデルを概観する。

2.1 <結果可能>の事象構造での位置づけ

日本語には、古くから「世の中を思ひはなれぬほだし³」のように、「自由意志でそれをしないのではなくて、そうしたいと思ってもできないから、結果としてそうしない」というような「結果的表現」がある。このような表現は、「なる」言語的特徴のひとつである。一方、同じような表現に対して、張(1988)は<結果可能表現>としてとらえている。張(1998)は<結果可能>を次のように定義している。

動作主がある状態変化を実現しようとして動作を行う場合、動作がなされた後、主体的または客体的条件によって、動作主に意図された目的、即ちある出来事またはある

³ 『古今和歌集』(939)



種の状態変化が動作主の思い通りに実現することができるかできないかを表わす可能表現である。(張威1998:99)

すなわち、日本語の可能表現の中に、「動作が行われた後、動作主の意図した状態変化が思い通りに実現するか否かを表わす<結果可能>(張1998:1)」という事象構造が存在するのである。たとえば、次のようなものが<結果可能>表現として考えられるものである。

5)a.腕が痛くて手があがらない。

b.喉が腫れて声が出ない。(張威1998:81)

5)はいずれも、動作主の意図した状態変化が実現できないことを、動作が行われた結果という視点からとらえようとする<結果可能>表現のひとつである。そして、張(1998:113)では、結果可能表現の意味的特徴に基づき、6)のように三つの点を結果可能表現の判別基準としている。

6)a.結果可能表現で取り扱われているのは、動作・作用ではなく、ある種の状態変化即ち出来事の成立である。

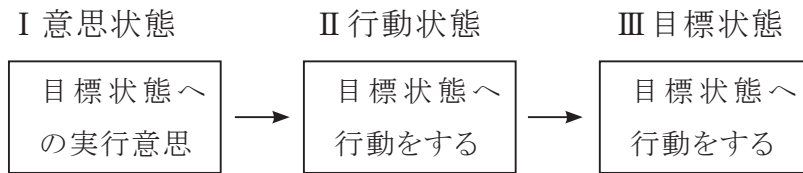
b.その状態変化は動作によってもたらされるものであり、動作の結果でなければならぬ。

c.その状態変化は動作主が動作をする時に意図したものであり、動作主の動作の目的でなければならぬ。

「なる」言語的表現である「結果的表現」と張(1998)の「結果可能表現」から<結果可能>による事象のとらえ方を、7)のプロセスのように導き出すことができるだろう。まず動作主に目標意思があること(I)から、この目標意思のもとである動作を起こして行動をつづけること(II)によって、最後に目的とした結果状態に到達できるようになる(III)のである。本研究ではこのような事象の流れを<結果可能>プロセスと呼ぶことにする。<結果可能>プロセスのなかで目的とした結果状態に到達する前に、何かの原因でうまくいかない段階を「未達成」状態としてとらえる。そして、「未達成」の段階を8)のように「未遂行」・「未完遂」・「未成功」の三局面に分けてとらえる。



7) <結果可能>プロセス



8) 結果未達成の三段階

「未遂行」: 「動作主が何かをしようとしたが、結局行動に移すことができずにいる」ように事態の不履行を表すものである。

「未完遂」: 「動作主が何か動作を実行していたが、目的の状態にまでは到達できていない」ように事態の進行状態を表すものである。

「未成功」: 「動作主が何かの動作を実行したが、希望したとおりの動作の結果状態となっていない」ように事態の不成功を表すものである。

7) <結果可能>プロセスおよびそれに基づいた8)未達成の三局面をふまえて、「一損じる」以外、9)~11)のように「-そびれる」・「-あぐねる」・「-そこなう」が「未遂行」という未達成事態を表すことがわかる。では、それぞれどのような異同があるのだろうか。

9) 株をそろそろ売ろうと思っていたら、いきなり下がってしまい売りそびれる。 www.granharvest.co.jp/nyumon/soubakakugen/modorimati.php

10) なかなか時間の都合が合わず参加しあぐねてたのですよ。しかも前もってイベント内容も知りもしないで、とりあえずアフロだけ被って飛び入り参加。 sakumira.exblog.jp/m2005-12-01

11) お盆に休みそこなうと次の連休は正月になる。まあ今のご時世、暇で休まざるを得ない状況よりはいいけれど。 ameblo.jp/2902525cbc/page-1.html

しかし、「-そびれる」「-あぐねる」「-そこなう」の未遂行表現を考察するにあたって、その造語力を無視することはできないと思われる。つまり、未遂行表現を解明するには語構成論的な考察が欠かせないということである。それ故、語の派生プロセスを考慮に入れば、全体的に「語彙的レベル」だけではなく、「文脈的レベル」の考察も考慮に入れるべきである。「語彙的レベル」と「文脈的レベル」にわけて未遂行事態を分析していくことにする。



2.2 《アスペクト・ヴォイス》モデル

「-そびれる」・「-あぐねる」・「-そこなう」の造語力を比較するために、本研究では石井(2007)の《アスペクト・ヴォイス》モデルを通して検討する。それは、表1のようにアスペクト・ヴォイスの性質から語構成要素を六つに分類しており、そのように分類したのは複合動詞の結合パターンおよびその性質をより深く把握できると判断したからである。

石井(2007)では、現代語の「動詞+動詞」型の既成の複合語を対象に、それがどのような仕組みによって形成されるのかという分析がなされており、「複合動詞形成の《アスペクト・ヴォイス》のモデル」4を提案して複合動詞の仕組みについての説明がおこなわれている。《アスペクト・ヴォイス》モデルにもとづいて、複合動詞の基本的な構造を[過程結果構造]と定式化されている。既成の複合動詞は構文活動以前に話し手に与えられている(語彙に用意されている)ものである。すなわち、《アスペクト・ヴォイス》モデルは、現代日本語の語彙に定着した複合動詞をもとにその結合原理を解釈するものである。

その中から「-そこなう」「-そこねる」を[他動的過程結果構造]的な[文法接尾辞構造]としてとらえている。文法的接尾辞はなにかというと、V1の表す運動の時間的局面やその起こり方を限定するものである。[文法接尾辞構造]は[語彙接尾辞構造]と比べれば12)のような特徴がある。つまり「-そびれる」・「-そこなう」・「-あぐねる」のような未達成の語構成要素は文法的接尾辞の性質を持っており、12)のような特徴をもっていると考えられる。

- 12)a. [語彙接尾辞構造]の場合では、V1とV2とも和語単純動詞であることが原則であるが、[文法的接尾辞構造]では「ドキドキし過ぎる」のようにV1に複合サ変動詞をもつことができる。
- b. [語彙接尾辞構造]のV1とV2との自他は殆どの場合一致するが、[文法接尾辞構造]にはそのような制限がない。
- c. V1が受身および使役の形をもとり得る。
- d. 意味的にはV2がV1を修飾している。

ここでは、[過程結果構造]から[文法接尾辞構造]への派生という観点および表1のように造語成分の特性に基づいた分類のしかたに注目する。

4 以下、《アスペクト・ヴォイス》モデルと称する。



表1 アスペクト・ヴォイスにかかわる語彙的意味にもとづく造語成分の分類

「～ている」という形をとらないか、とつても「状態」しか表せない	《主体の状態》を表す	「有る」「居る」…	自	①
「～ている」という形で「動作の継続」を表す	《主体の動作》を表す	「歩く」「踊る」…	自	②
		「言う」「書く」…	他	③
	《主体の動作》と同時に《客体の変化》をも表す	「上げる」「集める」…	他	④
「～ている」という形で「変化の結果の継続」を表す	《主体の変化》を表す	「固まる」「崩れる」…	自	⑤
	《主体の変化》が伴う《主体の動作》を表す	「着る」「かぶる」…	他 (再帰)	⑥

表1の六つの造語成分の分類はアスペクトおよびヴォイスの観点から分類したものであることがわかった。まず、アスペクトの点からみしてみる。①は、金田一(1950)でいう「状態動詞」と「第四類動詞」の自動詞である。②～④はいわゆる継続動詞であるが、自動詞と他動詞の性質の相違によって分けられる。とくに③と④は同じ他動詞であるものの、無対と有対の相違がみられる。その裏に「無対他動詞とは、《主体の動作》を具体的に表しながらもそれがひきおこす《客体の変化》には無頓着な『主体動作動詞』であり、有対他動詞は《客体の変化》をもたらす《主体の動作》を表す『主体動作客体変化動詞』である(石井2007:137)」という本質的な相違がある。⑤と⑥は結果動詞である。⑤は④に相対する有対自動詞であり、非対格自動詞でもある。⑥は④に分類することもできるが、働きかけの対象が主体であるため再帰他動詞とみてもいいだろう。ただし、⑥をたてるのは、複合動詞全体の構成要素の分類に関しては有意義であるが、未達成の観点では差異がないため、本研究では④の下位分類として扱うことにする。

また、表1のヴォイスの基準は、V1とV2の結合関係およびその意味論的意味によるところが大きいようである。たとえば、「できる」は、アスペクト的性質からいえば①に属すべきであるが、「でき上がる」「でき損じる」になると、何かがある作用過程を経てその結果ができたかどうかという意味合いで、この場合の「でき-」は⑤の主体変化動詞に分類される。また、⑥の再帰動詞の場合では、「着-」「着替え-」「履き-」「もら-」「借り-」な



どは、変化の結果が主体にもどるという点では再帰動詞に分類することができる。しかし「預け-」ならば③の主体動作動詞としてとらえるはずであるが、「預け入れる」のようになると、V2の「-入れる」によって預けたものは主体にもどるため、この場合ならば⑥の再帰動詞に分類されるのである。

石井(2007)で提案された《アスペクト・ヴォイス》モデルおよび「過程結果構造」の考え方は、未達成の語構成要素にどのような事象表現機能があるのかという考察に際しては、重要な視点を提供していると思われる。

3 語彙的レベルにおける「未遂行」段階の相違

ここでは、語の構成段階においては「未遂行」パターンを表す機能をもつ「-そびれる」・「-そこなう」と「-あぐねる」の相違を考察する。主に、それぞれのLCSの類似性および結合する語構成要素の性質に重点をおいて分析する。

3.1 V1の事態の相違

未達成語彙のLCSを比較する前に、「未遂行」を表現する場合、それぞれどのような未達成語彙が形成されやすいのか、接続しやすいV1の中身を比べてみる。以下、前後の使用状況をあわせて、それぞれが接続するV1を13)～15)のように表示しておくことにする。

13) [-そびれる]:[動詞連用形]

- ①その場に居そびれたかなしい現実。
- ②夏祭りに行きそびれた; 初回の授業に出席しそびれてしまった; 会社説明会に参加しそびれてしまったら; 就職氷河期に就職しそびれて負け組になっちゃった; 今日お葬式で泣きそびれました; ……。
- ③クリスマスカードを送りそびれたら; おごってもらったお礼を言いそびれたまま; 買いそびれたCDを手に入れて; 先ほど質問で答えを聞きそびれたような気がする; 小松地獄で温泉玉子を食いそびれた; ……。
- ④離れたところに住む友人に出産祝いをあげそびれ; 年賀状を出しそびれたお詫びを必ず書くように; 亡き父へ「伝えそびれた言葉」; 家計簿をまとめそびれ



てた;大阪の友達からの電話を取りそびれて;……。

- ⑤音が静かでエンジンかかりそびれたかと思いました;安堵のあまりセリネットの目から流れそびれた涙が一粒落ちた;新しい環境に慣れそびれた;メモした仕事内容を忘れて仕事ができそびれた時;……。

14) [-そこなう]:[動詞連用形]

- ②楽しみにしていた展示に行きそこなう;すばやく降りないと降りそこなうので注意;お昼に出そこなって、いま近くのファミマでお弁当を買って;今朝も強い寒さに起きそこなった;……。
- ③聞こうと思っていたことを聞きそこなう;マラッカにて激辛カレーを食いそこなう;今回はネタを仕入れそこなってます;洗濯しそこなった汚れ物を直射日光の下に;決定的瞬間を録画しそこなった;……。
- ④私は人形師に声をかけそこなった;お返事を出しそこなうことも多く;不作為障害とは、クラッシュ、要求を受信しそこなうこと、応答を返しそこなうことなどを指す;せっかく書いたブログをあげそこなう;……。

15) [-あぐねる、-あぐむ]:[動詞連用形]

- ②いまいち信用できずにその歯医者さんに行きあぐねています;震災が起こった日の帰りあぐねる人々;学校行きたくないから起きあぐねてたら;本当は海へ山へ出かけたのに出かけあぐねて;困りあぐねて思いついたのが漢方薬;……。
- ③ためらいがちに何度も言いあぐねて;革命を起こすにはどうすれば良いかを考えあぐねている;聞きたいけれども聞きあぐねている私;くりかえし自問し、その答えを尋ねあぐねてきたのである;…。
- ④本命チョコを作って渡しあぐねている女の子;「明日行くね」の母への電話をかけあぐねた;俺が言葉を返しあぐねていたら;どう切り出せばいいのかわからなくて;米1合炊いたけど未だにオカズを決めあぐねてる;……。

13)~15)を観察し、二つの事実に気付いた。ひとつは、②~④のV1には三者とも接続することがあるが、①と⑤の接続は「-そびれる」のみ観察することができる。もうひとつは、三者ともに②~④のV1に接続することはあるが、必ずしも同じようなV1と接続するとは限らない。たとえば、「乗りあぐねる」「歩きあぐねる」「思いそこなう」は通常、「未遂行」を表すことはない。前者は使用状況をあわせて4で考察することにし、ここでは後



者に注目して検討する。

16)「未遂行」の語彙

未遂行 \ V1	「思い-」	「言い-」	「乗り-」	「渡し-」	「歩き-」
「-そびれる」	△	○	○	○	○
「-そこなう」	×	○	○	○	○
「-あぐねる」	○	○	×	△	×

16)は、それぞれのV1の性質を通して未達成語彙の結合を観察したものである。「-そびれる」は、「V1の事態を実現しようとしながらも、それを実行するタイミングを逃して失敗する」ことをあらわすことから、二つの意味的構成要素があると思われる。ひとつは「V1の事態を実行する意思がある」こと、もうひとつは「実行する機会がなくて失敗する」ことである。そうであるとすれば、ひとつの意味的構成要素しかないV1ならば、「-そびれる」と接続しにくくなるのである。「思いそびれる」が「外部への実行意志が含まれていない」ことから普通その結合はあまり考えられないのである。そのため、「困りそびれる」「浮かびそびれる」などの表現は普通ありえないのである。それに比べると、17)のような「思い出しそびれる」のほうは、より自然である。

17)ベースのかたは、会う度に何か思い出しそびれているような気がしていた理由が、今日わかった。19歳の頃に心底好きで大好きだった20歳年上の人に似ていた。d.hatena.ne.jp/kudoazu/20111223/p1

それと比べれば、「思い損なう」がない場合は、また「思いそびれる」の場合と異なる事情によるものと思われる。それは、「-そこなう」の事象表現機能によるのである。黄(2011)では、「-そこなう」の事象表現機能は、V1の事態に「どの局面にあるのか、その起こり方を限定する」と指摘されている。すなわち、「-そこなう」は、V1の動作の実行を局面的にながめるものである。このような表現機能から「言い-」などの主体動作動詞の場合と比較的接続しやすいのである。それに対して、非意志表現の心理的現象をあらわす「思い-」「心配し-」などの場合は、「未遂行」の局面を表現するにあたっては、おのずと成立しにくくなるのである。

一方、「-あぐねる」のほうは、「思い-」のように心の中にずっと実行できるV1、あるいは「言い-」「渡し-」のような瞬間動詞との結合ができる。それに対して、「乗り-」「歩き-」



のように外部事態を表す継続動詞と接続すれば、「未遂行」というよりも「未完遂」として解釈されるのである。いいかえれば、「未遂行」の場合、「-あぐねる」は外部事象を表す継続動詞と結合しにくいのである。

3.2 LCSの相違

未遂行段階における「-そびれる」・「-そこなう」と「-あぐねる」の語彙概念構造についてはどのような異同があるのか。ここでは、黄(2009、2010、2011)で規定されたそれぞれのLCSをもとに、比較しながら検討する。

18) 「-そびれる」: <機会を失ってできなかった>

= [[[[]x ACT ON []y] CAUSE[BECOME [[] BE AT-[failed]z]]]]

「-そこなう」: <悪い状態にする>

= [[[[]x ACT ON []y] CAUSE[BECOME [[] BE AT-[bad]z]]]]

「-あぐねる」: <困り果てる・もてあます>

= [[[[]x ACT ON []y] CAUSE[BECOME [[] BE AT-[a loss]z]]]]

18)は、主体動作動詞あるいは主体動作客体変化動詞のV1に接続するそれぞれのLCSのプロトタイプである。基本的に主体の動作([[]x ACT ON 5 []y])の部分と、その動作から客体変化への影響(CAUSE[BECOME [[] BE AT-[a loss]z])からなるものである。ただし、外「未遂行」事態に対する言語話者のとらえ方によって取り立てる部分が異なる。すなわち、「未遂行」の場合は、動作を実行する意図があるものの行動を引き起こしていないために主体の動作を表す意味要素を取り立てずに表示するのに対して、事態全体が未達成の段階であることを示すためにそれぞれ未達成を意味する要素を太字で取り立て、結果未達成の部分を言語主体によって前景化するということがあらかずものである。ただし、次の三つの点においてはそれぞれ異なっている。

まず、それぞれの結果未達成に対する言語話者のとらえ方が異なる点である。「-

5 ②の主体動作を示すならば、ONの意味素性を背景化し、表示しなくなる。



そびれる」がくチャンスを逃して不成功([[] BE AT-[failed]z]) >、「-そこなう」がく動作の実行がうまくいかずにしなかった([[] BE AT-[bad]z]))、「-あぐねる」がくずっと実行しようとしてもなかなかできずに困る([[] BE AT-[bad]z]))、というように外部事態に対する言語話者のとらえ方がそれぞれ異なるのである。

次に、「未遂行」パターンの性質にも違いがみられる。「-そびれる」については、V1が人間主体の動作動詞である場合、「忘却」の事態を表すことがあるが、基本的に「未遂行」の局面における「失敗」の事態を表すことが中心である。「-そこなう」の「未遂行」は、V1の事態をアスペクト的側面に着目し、V1の動作主体の実行意図が不成功に終わったことを意味するのである。「-あぐねる」は、「参加しあぐねる」のように、V1の事態をずっと執行しようとしていて、何かの事情でなかなかできないという「未遂行」事態から、「動作を実行する意思の持続性」を強調するのである。

最後に、V1の事態とのかかわりについての相違である。「-そびれる」はどのような種類のV1と接続しても「未遂行」の事態を表すのである。しかし、「-そこなう」と「-あぐねる」は、「未遂行」とも「未完遂」ともとることができる。すなわち、[食べ損なう][参加しあぐねる]のように使用状況によって「未遂行」とも「未完遂」とも解釈できるのである。

4 文脈レベルにおける「未遂行」段階の事象表現

3では、V1との結合の適切性によって、「未遂行」の未達成語彙の語構成論的性質を検討してきた。そこではV1と結合した不自然さから、互いの異同が明らかとなった。ここでは同じV1と結合した未達成語彙が自然である場合、互いに事態表現上どのような異同があるのか、また、①と⑤に接続する「-そびれる」の性質がどのようなものであるのかを考察する。

4.1 「未遂行」を表す事態背景

まず、使用状況において「-そびれる」「-そこなう」「-あぐねる」の「未遂行」表現が成立する事態背景の相違を考察する。

- 19)a.最後の瞬間、不二とちらりと視線ががち合ったような気がして余計に動揺してしまう。慌てて練習メニューに集中する。結局、おめでとうをいいそびれてしまったな、と手塚は不二の後姿を見送った。



homepage2.nifty.com/yoruno/old/day.html

b. 実は、レッスンの時に靴のことに気がついていたのですが、言おう、言おうと思っていたのに、他にも沢山言うことがあって、言い損なってしまったのです。

blog.livedoor.jp/kiyo_ballet/archives/cat_50247513.html

c. 言いたいことがある筈なのにそれが何か分からず、言いあぐねているうちにこんな風になってしまったのだけれど、今考えてみればそれはお前のことが好きだっていいかったんだなあ、と。

members3.jcom.home.ne.jp/lyrictrigger.../l_omokage15.html

19)では「未遂行」の未達成語彙のそれぞれの事態的性質がうかがえる。aの[いいそびれる]は言いたいこと(おめでとう)があって、何かの事情(気持ちの動揺)でそれを言い出すタイミングを失い、結局言い出せなかったのである。一方、bの[言いそこなう]は言いたいこと(靴のこと)があってそれを言おうとしていたが、事態進行(ほかに沢山言うことがある)の流れで結局言い出せなかったのである。両者ともにはっきりと言いたいことがあって言い出せない点では同じであるが、前者はタイミング的に、後者は事態の流れ的に、結局言い出せないことになるのである。それに対して、[言いあぐねる]は異なった事情によると考えられる。cの場合、「うまく言葉が見つからずに困って結果言えない」ことから、「言おうか言うまいか迷う」の意味である。すなわち、主体は「ためらいながら」「言おうか言わないか迷う」「適切な言葉が見つからない」などの事情により、言いたいことを言い出せないのである。

以上、「未遂行」の局面を表現しながらも、それぞれの未達成語彙の性質は外部事態の成立に反映していると思われる。それをまとめると、次のようになる。

20)未遂行における成立背景

語彙	背景	事態の成立背景
[-そびれる]		忘却かタイミングの問題による未遂行
[-そこなう]		事態の流れ的による未遂行
[-あぐねる]		心の中で迷うことによる未遂行

4.2 ①と⑤のV1と接続する「-そびれる」

3.1では、「-そびれる」は「-そこなう」「-あぐねる」と異なり、①と⑤のV1と接続して「未



遂行」の事態を表現することができることがわかった。なぜそれができたのだろうか。まず、①のV1を検討する。

21)その場に居そびれたかなしい現実！だけど、ちょっとした事が、この後起こった～「ペット入店禁止の看板」聞きわけのいい猫。p.twipple.jp/u8qQ6

22)この時間に居そびれるとヌコ缶喰えないので必死で帰ってきます。

www.logsoku.com > ログ速> 趣味> 犬猫大好き

「居そこなう」「居あぐねる」は形成しないが、「居そびれる」は21)のように用いられることがある。それは単に「いる」の語彙的意味との結合によるというだけではなく、文脈からの要請によるところもあると思われる。21)・22)の「そこにしようと思ったが、機会がなくて失敗した」という意味あいから、「-そびれる」は形成した語彙全体に意図性を与えるのである。言い換えれば、「そこにいる意図」は「-そびれる」によって未遂行の意味を補うようになったのである。次に⑤のV1を検討する。

23)音が静かでエンジンかかりそびれたかと思いました(笑) いつも車を預けると新車の代車を貸してくれるので、緊張しますがオモシロイです。

www.toma.jp/blog/5976/index.php?entry_id...site...

24)お金の話も生々しい。施設は高い、私だって仕事あるのよ、難病だからどこまで看られるか分からない、等々。しかも親のことを「あの人」なんて呼んでる…お空は折角晴れたのに、私の心は隣の話で晴れそびれた

ameblo.jp/spinozavelvet/archive1-201105.html

25)一番の殊勲者が出遅れ、ナインの歓喜の輪に入りそびれた。それでも「優勝できたからいい」と笑った。

draft.liblo.jp/archives/3299063.html

23)は非人間の主体変化であるのに対して、24)は人間の一部分の主体変化、25)は人間の主体変化動詞の場合である。23)の[かかりそびれる]では、「エンジンがかかる」という事態をアスペクト的側面としてとらえ、文中の動作主は「音が静かである」ことから、「エンジンがかかるという始動状態にさしかからず、できなかった」ことを含意するのである。また、24)の「心が晴れそびれる」は、「空が晴れる」おかげで「心も晴れる」はずなのに、多くの暗い話のせいで心が晴れることができなかったのである。最後に、25)では、文中の動作主が自分をも入れようとしたが入らなかったという状態で「ナインの歓喜の輪に入りそびれた」事態が成立す



るのである。この場合、文中の動作主がV1の動作を実行するというよりも、「自分をも入れようとしたが、入らなかった」という事態変化の結果状態として捉えるほうが適切であろう。このことから、V1が⑤の主体変化動詞である場合、人間主体であっても、主体動作の意図性よりも主体状態の変化に着目することがわかった。以上をまとめると、「-そびれる」の事象表現機能は「V1の事態のアスペクト側面に着目し、その始動状態にさしかかるが、できなくて失敗する」ことを表すのである。言い換えれば、この機能から、[居そびれる]を解釈することができるだろう。すなわち、決まった予定(食事時間)があるために、その時間までにある場所に戻らないと食事のヌコ缶を食べられなくなることを含意するのである。一方、「一方通行なので、止まりそこなうと公園を一周することになる」「新築で売れあぐねているのに」のように「-そこなう」「-あぐねる」は⑤のV1と接続することはあるが、「未遂行」の事態を表現するものではない。

5 むすび

本研究は、日本語の未達成事象における「未遂行」の局面をとりあげ、「-そびれる」「-そこなう」「-あぐねる」によって形成された語彙を対象に考察を行ったものである。同じ「未遂行」の局面を表現しながらも、それぞれ異なった事態を表すことがわかった。

語彙的レベルにおいては、18)のようにそれぞれ異なったLCSを持っているが、特に事態未達成の状態に関するとらえ方には相違がみられるのである。また、三者が接続するV1の性質も異なることが分かった。《アスペクト・ヴォイス》モデルによると、「-そこなう」「-あぐねる」は②～④のV1のみに接続するうえ、それぞれ異なった性質のV1に接続するのである。それに対して、「-そびれる」は①～⑥に接続することができる。それは、「-そびれる」の語彙的性質によるものであることがわかった。一方、文脈的レベルでは、成立背景の相違によって20)のように「未遂行」局面の解釈も異なることが明らかとなった。[-そびれる]の未遂行事態は、「忘却かタイミング的に」実行しだせずに失敗するのであるが、[-そこなう]のそれは事態の流れによって結局実行しなかったのである。一方、[-あぐねる]の未遂行事態は、[考えあぐねる]のように「心の中でなにか迷う」ことがあってなかなか実行に移さない状態を表すものである。

また、「未遂行」の局面を捉えるには、外部事態に関する言語話者の事象把握のか



かわりも欠かせないことがわかった。それは、同じ「未遂行」の局面の表現にもかかわらず、外部事態に対する言語話者のとらえ方の相違によって[-そびれる][-そこなう][-あぐねる]の言語形式が選ばれており、それぞれ異なった事象が表現されるのである。言語研究に際して、言語表現・外部事態・言語話者の三要素を考慮に入れる必要があることを示唆するといえよう。

本研究は、日本語の未達成事象を解明する第一歩として位置づけることができる。しかし、未達成事象では「未完遂」「未成功」の局面に関する研究が残っており、これらの局面の解明を今後の課題としたい。



参考文献

- 石井 正彦 2007 『現代日本語の複合語形成論』 ひつじ書房
- 由本 陽子 2005 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房
- 影山 太郎 1993 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 2010 「動詞の意味と統語構造」『ひつじ意味論講座1 語・文と文法カテゴリーの意味』 ひつじ書房
- 黄 其正 2004 『現代日本語の接尾辞研究』 溪水社
- 2009 「未達成性の接尾辞に関する研究—『あぐねる』『あぐむ』を対象とした一考察」『2009台大日本語文創新国際学術研究会論文集』pp77-89
- 2010 「語構成要素の意味分析へのアプローチ」『第七回応用日語学術研究会論文集』pp49-64
- 2011 「『—そこなう』の事象表現機能についての一考察」『台湾日本語学報30』pp219-243
- 張 威 1998 『結果可能表現の研究』 くろしお出版

